

# 次代を創る 匠たち

広く建設業界には施工協力会社の組織・団体があり、建築板金でもこうした技術集団が多く現場を支えている。三晃金属工業の三友会もその一つ。連合会を起点に全国10ブロックで展開する中、それぞれに有する青年部会では、少子高齢化を背景に成り手の確保が一段と難しくなっている。

## ③ 「現場を支える技術集団」

北海道の施工協力会「北三友会」の青年部会が主導する、新商品開発会議だ。独特の気象条件も相まって、北海道では本州と異なる製品の仕様を求める声が少ない。かねて業界関係者から挙がった「現地の人たちが考えてみたかどうか」との投げ掛けを機に立ち上げて以来、昨夏から月1回の頻度で開催している。

新商品は、深刻な人手不足の対策として省力化などを考慮して検討を重ねる。目指すのは「これまでにない商品」。現場



北、大阪両三友会の青年部会による研修パトロール。広域なネットワークが新たな魅力を引き出す

模索する。三晃金属の若手社員と継続的に実施してきた合同勉強会もその一環。商品の説明や講演を聞く従来の形式から、実

# 実践に即した活動、主体的な参加導く

の前線に立つ若手ならではの発想がカタチになりつつある。会長の大和田直人さんは「最終的な販売に向けて着実に進展している」と手応えを感じる。

この会に入っているからこそ得られるものは何か。日ごろ現場で経験を積むとともに、三友会全国連合会の青年部会では「団体ならではの学びの場を

実践に即した内容で参加者が主体的に関われる構成に変えた。三晃金属がこれから施工する契約物件を題材に、施工計画や人員配置、荷揚げ計画など各々が互いを引き付ける。

伝ってか、「一人ひとりプライドをもって仕事をしており、自分なりの技術に対する考えをしっかりと持っている」「溝口さんがゆえに、息遣いあるやり取りが一連の活動が始まって1年余り。青年部会の会員数は全体で102人から133人に増えた。減少に歯止めがかかる一方、

「参加する企業にとっては自社の参考にもなり、より良い現場づくりにもつながる」。三友会全国連合会青年部会会長の溝口純也さんは勉強会の意義をこう説明する。それを裏付けるかのように、各席からは積極的な発言が相次ぐ。

出席者には、従来の顔ぶれに加え、職長、その同僚らが名を連ねる。入会の門戸を広げることで、かつてない刺激が加わり、ディスカッションにも深みが生まれる。年齢が近い者同士、普段から馴染みのあるテーマも手

取り組みの継続性や内容のブラッシュアップも看過できない。それぞれの取り組みを入会の動機にどう結び付けるかが問われる中、溝口さんは「誰もが魅力を感じられる」、ここにしっかりと力を入れている。

青年部会では、安全対策に若手の考えを取り入れられないか、新たな活動の糸口を探る。進化を遂げる製品に技術が融合すれば、みんなの仕事がより良いものへと変わるかもしれない。「自分たち、ひいては業界のためにもなる」と。建築板金の未来を誘うだろう試みは、緒についたところ。強く熱い思いに広域なネットワークを誇る三友会の地の利が合わかり、これまで以上に活発な技術集団へと導いていく。(中野 裕介)

建築板金業界で次代の担い手たちが奮闘している。あすの未来へ、日本が誇る技術をどう受け継いでいくのか。板金職人の道を歩むその姿に迫る。(随時掲載)

\* 鉄鋼新聞社様の許可を得て掲載しております。  
\* 掲載内容の無断転載、複製を禁止します。